<お問合せ先> TEL: 03-3580-2551 (一財) 日本建築総合試験所 フェロー (プロト・エコ) デッキ標準図 (鉄筋トラス付捨て型枠床版工法) 標準納まり図 < S 造 > (1方向) (GBRC性能証明 第22-13号) (株) 東京富士昭 FAX: 03-3580-2552 2022年10月11日 改定 主筋方向納まり図 ※頭付きスケッドの仕様は、設計図書による。 配力筋方向納まり図 *頭付きスケッドの仕様は、設計図書による。 工場で捨型枠と床用鉄筋(主筋方向のみ)を一体化して生産された床構成材を現場にて染間に敷き並べる。 上端主筋 下端主筋 ラチス材 吊り材 Aタイプ その後、主筋連結筋及び配力筋を配置し、現場打ちコンクリートを打設して床版を構築する工法である。 15d Lx/4 | Lx/4 15d 主筋間隔以下 主筋間隔以下 D13 Rタイプ D1.3 2.断面図 ∁タイプ D13 D10 主筋閻陽以上の場合 60 5.20 0.4mm --- コンクリート流れ止め /-- コンクリート流れ止め - 端部追加補強主筋 現場配筋必要 < 上下筋: -吊り材 5.200170 Dタイプ (又は 7¢) (∑は 6¢) /亜鉛メッキ鋼板 - 端部追加補強主筋 / 上端主筋 ∠ 上端配力筋 / 梁上流し筋 Eタイプ D16 D16 、めっき量 Z12丿 RDタイプ D13 D16 プロト フチス材 6 φ (又は 7 φ) - 用り材 5.2 φ (又は6 φ) **0**170 - 吊り村 5.2¢ (又は6¢) @170 **@**200 ΙJ - 円り柄 3.2 ♥ へ - 下á主筋 - 先端部の配筋納まりは、設計図書による ・ - 先端部の配筋納まりは、設計図書による — 波板 t‡ 0.4mm 内端部 5. 施工手順及び留意事項 外端部 内端部 内端部 外端部 内雏部 (敷き終りが調整板の場合) (デッキ接続部) (1)搬入・荷揚げ・仮置 スラブ中間部 主筋方向段差納まり図(参考例) スラブ中間部 配力筋方向段差納まり図(参考例) スラブ端部 主筋方向段差納まり図(参考例) スラブ端部 配力筋方向段差納まり図(参考例) ・荷揚げは2点又は4点吊りとし、ハゼの保護に留意し、スリング(布帯)等にて荷揚げする。 フェロー (プロト) デッキ 形状 ・敷き込み方法に合わせて、ハゼ方向を確認し仮置きする。 H ≤ 100mm 一吊り材 5.2¢ (又は6¢) @170 (2)取 付 ・割付図の施工順序により、1枚目より順次取付する。 < ト下筋> 主筋と同径・同量 ・ハゼが潰れている時は、シノ等で修復し、確実にハゼかけを行う。 ・デッキの固定方法は、S造の場合端部材をアーク溶接にて梁に固定し、固定位置は幅方向については1枚 30 (600幅)に対し片側2ヶ所以上、かつ400mm以下とする。 〜─波板 t=0.4mmim ・柱廻り・梁斜め部は、波板・鉄筋を切断し、端部材(L型筋)を復旧する。復旧の際に端部材とラチス材の 200 端部の偏心距離が30mmを越える場合は端部の補強を行う。 ・幅方向の調整は、カット製品、又は調整板にて行う。 フェロー(エコ)デッキ 形状 ・間仕切壁等のある場合は、液板のみ切断する。 100mm < H ≤ 2t ■直線でL2を確保できない場合は、梁内で定着を確保する。 100mm < H ≤ 2t ■直線でL2を確保できない場合は、梁内で定着を確保する。 連結筋及び追加補強主筋納まり図 異方白納まり図 3.標準納まり図 (3) 梁上の上端主筋連結(定着)筋 ・重ね継手長さは L1以上、定着長さは L2以上 とする。 一吊り材 5.2¢ (又は6¢) @170 諸部材(1型) /-- 受け筋 <上下筋>主筋と同径・同量 一 (配力筋の定着長さ) L2 L2 (連結筋の定着長さ) スタッド― ・重ね継手長さは L1以上、定着長さは L2以上 とする。 (連結筋の重ね継ぎ手長さ) し 結束は600mm以下を標準とする。 **孕型配信部** (5) 施工時の注意 段差金物 (乙型)— 段差金物 (Z型)----下端主笛 — 按版 t=0.4mm ・鉄筋・ラチス材・吊り材を一体化したデッキは、施工時支保工の役目を持つ構造材であるため、部材の切断は ト籍筋 3-DI3 スターフップ □ -D10 (関隔はトラス筋関隔に使う) L2(重) スターフップ ア+⊿1-D10 || 波板かかり代 溶接固定 (片側2箇所以上、かつ@400以下) (固隔は配力固隔に做う) 行わないこと。設備・配管工事のためコンクリート打設前に切断の必要がある時は、支保工等の補強を行う。 ・開口部は、大きさにより定められた補強方法で開口補強を行う。 0~30 30 (波板 かかり代) 15d Lx/4 Lx/4 15d ・仮設時許容スパンを超える場合、及びデッキ部材を切断する場合は、仮設サポートを設ける。 梁内寸法 L2(*****) 30~60 --- 受け筋 <上下筋>主筋と同径・同量 ~ *端部材とラチス材の偏心距離が30mmを超える場合は、端部の補強を行う。 (6) 直線重ね継手長さ・定着長さ(普通コンクリートの場合) 柱・梁絥手廻り納まり図 / 上端配力筋 重ね継手長さ 継手部分 柱廻り部分 あき重ね継手について 設計其准础度 (12)45d 40d タイプ表示 例) B 80 − 110 → H2 (H + b) MM.M. 操型配筋部 上端筋 3−D13 下端筋 3−D13 操型配筋部 上端筋 3−D13 下端筋 3−D13 40d 35d X 24~27 タイプ (上下弦材の組み合わせによる) SD295 35d 30d 支保工 — 30~36 | L2(★) | (間隔はトラス筋間隔に使う) 【L2(★)】 (圏隔は配力間隔に扱う) i) あき重ね継手長さ(L1) プロトタイプ L1 ≥ 375mm エコタイプ L1 ≥ 500mm A ,eA 39~45 ----B , eB : 上 D13,下 D13 48~60 サポートを設置する場合の注意事項 C , eC : 上 D13 , 下 D10 ※本物件の設計図書(構造標準図・仕様書等)が上表と異なる場合は ---デッキ受け(別絵T事 ---デッキ受け(別絵T車 D , eD : 上 D16,下 D13 段差増打ちのある場合、施工荷重と吊り材と波板の浴接耐力を比較し、サポートによる補強方法が異なります。 本物件の仕様を優先する。 E ,eE : 上 D16,下 D16 フェローデッキ鉄筋を鉄骨に溶接することはできるだけ避けたい。溶接する場所はできるだけデッキ受けとしたい。 1。溶接耐力が施工荷重未満の場合 トラスと直交方向に必要数を配置する。 RD, ReD : 上 D13,下 D16 2。溶接耐力が施工荷重以上の場合 溶接耐力が不足する範囲をベニヤ型枠などを介し、波板面全体を支えるように補強する。 フェロー(プロト・エコ)デッキ スラブリスト 盟口補強(現場配筋) 業鉄筋を切断した際の小□補係方法は、腎理者と協議のこと。 450mm < 開口幅 ≤ 700mm 開口幅 ≤ 200mm 200mm < 開口幅 ≤ 450mm n1:切断した主筋数 n2:切断した配力筋数 トラス直交方向〈長辺方向〉 追加補強主筋 (現場配筋) 複数の開口が隣接してもかぶり厚さを確保できる場合は、独立した開口と見なす。 (現場配筋) 独立した開口と見なせない場合は、開口幅に準じて開口補強を行う。 位置 かぶり厚さを確保できる場合 - 補強筋(切断する鉄筋と同径・同量) -- 補助筋 2-D10 〈D 範囲〉 — 補強筋 n2/2 上端筋 ─ 補強筋 n2/2 (切断する鉄筋と 同径・同量) 下端筋 上端筋 補助筋 1-D10 下端筋 上端筋 ─ 補強筋 n1/2 ・補強筋(切断する鉄筋と同径・同量) -- 補強筋 n1/2 下端筋 (切断する鉄筋と 同径・同量) (連続張り時) (単張り時) 上端筋 補強を行う開口 (補強筋) 関ロ幅 下端筋 (補強筋) かぶり厚さを確保できない場合 (例:包絡した開口幅が450mm以下の場合) トラス直交方向〈長辺方向〉 上端筋 下端筋 下鋪筋 下鋪筋 配力筋一 ラス直交方向 上端筋 補資務〈上下務〉 補強筋<上下筋> 下端筋 D 上端筋 (切断する鉄筋と 下端筋 中央部 上端筋 下端筋 (切断する鉄筋と 同径・同量) (補強筋) L2 (補強筋) L2 (補強筋) L2 配力筋一 【 開口幅 】 L2 】 (補強筋) 主筋方向(デッキ方向) L2 関口幅 L2 → 配力筋方向 - 配力筋方向 → 配力能方向 → 配力能方向 特記事項 設計・監理 丁事名称 1:20 図面名称 倒番 ♠式会社 東京富士昭 フェロー(プロト・エコ)デッキ標準図